

# ブラジルにおけるドイツ系移民について

宇佐美 幸彦

## 1. ドイツ移民の始まり

1908年4月28日、日本からの最初の移民を乗せた笠戸丸が神戸港を出港、6月18日、165家族781名がサントス港に到着した。したがって2008年には日本からのブラジル移民の歴史はちょうど百年となる。ドイツからのブラジル移民はこれよりも古く、180年を超える歴史を持つ。1824年7月25日がドイツ系ブラジル人の「移民の日」となっている。

本格的な移民が始まる前に、ブラジルへ渡ったドイツ人の事例も数多く報告されている。1500年にポルトガル人ペドロ・アルヴァレス・カブラールがブラジルを「発見」したが、すでにこのカブラールの船員の一人に、航海顧問としてヨーハン Meister Johann (ジョアン) というドイツ人が乗り組んでいたといわれる。またホンベルク出身のドイツ人ハンス・シュターデン (Hans Staden, 1525-1576) は、スペインの探検船に乗り込み南米へ向かったが、船が難破しサン・ヴィセンティへ漂着して、ポルトガルの砲兵となり、1548-55年にブラジルで暮らすこととなった。インディオとの戦で捕虜となり、生命の危機に脅かされながらも、原住民たちの生活習慣を詳しく観察した。その後命拾いをしてドイツへ帰り、『野蛮で裸体で獰猛な人食い人間たちの住む場所の記述、本当の話』という本を1557年に出版した。これはドイツ語ではもちろんのこと、そもそも世界で最初にブラジルについて詳しく記述した書物である<sup>1</sup>。

---

1. Karl H. Oberacker Jr., Die Deutschen in Brasilien, in: Hartmut Fröschle, Die Deutschen in Lateinamerika, Schicksal und Leistung, Tübingen und Basel (Horst

この他にもポルトガル政府に雇われブラジルへ行った軍人や技術者のドイツ人はいたとしても、ブラジルは、「発見」から19世紀の初めまでの約300年間は、閉鎖的なポルトガル植民地として維持され、アフリカからの奴隷の「輸入」を別にすれば、「移民」に対しては門戸を閉ざしていた。サトウキビや木綿の栽培、金鉱やダイヤモンド鉱の発掘を中心として、黒人の奴隷労働を前提とした植民地社会が続いたのである。

19世紀初期に、鎖国の廃止、ポルトガルからの独立という歴史上の二つの大転換を経て、ブラジルは一転して多くの移民を受け入れるようになった。この大きな変化の根本的な原因は、19世紀になり市民社会が世界に広がり、アメリカ独立戦争やフランス革命を経て、奴隷制を廃止すべきであるという民主主義の流れが南米にも及び、従来の植民地主義がもはや時代の流れに適合しえなくなったことにある。ブラジルの変化の直接的な要因はヨーロッパにおけるナポレオン戦争という激動であった。

1807年11月29日、ブラガンサ王家のポルトガル摂政ジョアンはナポレオン軍の侵攻により、王室をリスボンからリオ・デ・ジャネイロに移すこととし、ポルトガルを離れた。王室は政府、軍部、教会、裁判所などに関係する貴族たち約1万5千人とともに、フランスと対立していた英国の艦隊に護衛されて、1808年1月24日バイーアに到着、しばらく同地に滞在した後、1808年3月8日、リオ・デ・ジャネイロに到着し、ここを首都とした。当時ブラジルの人口は約360万人で、うち奴隷が約191万人であった。つまり半数以上が奴隷で、奴隷労働が社会を支えていた。ブラジルに移ったポルトガル王室は次々に新たな政策を打ち出した。

まずこれまで植民地を独占するために長年続けてきた鎖国政策を解き、1808年1月28日、ブラジルの港が友邦国に開港された。さらに王室は外国からの移住を促進するため、1808年11月25日に、外国人の土地所有を認め、

---

Erdmann Verlag), 1979, Bd.1, S.170f. なおシュターデンの書物の原題は“Wahrhaftige Historia und Beschreibung einer Landschaft der wilden, nackten und grimmigen Menschenfresserleute”である。

外国人にもセズマリア（未耕地の無償分譲）を与えることを決定した。

1815年、ジョアン摂政は、「ポルトガル・ブラジル・アルガルヴェ連合王国」の宣言をした。これによりブラジルはもはや植民地ではなく、ポルトガルと対等の立場の王国となった。1817年、摂政であった王子ジョアンは、母のマリアのあとを継いで、ジョアン六世として戴冠した。ブラジル銀行の設立（1808年10月）、政府各省の設置、新聞の発行など国家としての制度が短期間に整えられた。しかし政府諸機関のポストはポルトガルから来た王室の側近によって占められ、砂糖・綿花の価格の下落に加えて、開港によって大きな損害を受けたブラジルの大土地所有者からは大きな不満が噴出するなど、波乱を含んだ新国家の誕生であった。

1817年、ジョアン六世の息子、皇太子ドン・ペドロはオーストリアのハプスブルク家フランツ一世皇帝の娘レオポルディーネと結婚した。これはナポレオン戦争後のウィーン会議でヨーロッパの旧体制の復活を図り、各国の王室を婚姻によって結び付けようとしたメッテルニヒ政策の一環であろうが、後に述べるように、ポルトガルから独立後の初期のブラジルに主としてドイツからの移民が導入される要因ともなった。（当時はドイツとオーストリアは明確に分かれていたわけではなく、1815-66年の時期にはオーストリアはドイツの他の領邦国家とともに、「ドイツ連邦」の一員であった。）

新生のブラジル王国は、ヨーロッパ（とりわけドイツ）からの移民を促進し、国力の強化を図ろうとした。1818年、王朝は移民経費を計上し、バイーア州南部にレオポルディーナとサン・ジョルジュ・ドス・イレウスの2植民地を設定した。1819年には、リオ州ノーヴァ・フリブルゴ（Nova Friburgo）に361家族1,682名のスイスのフライブルク（Freiburg）出身者を中心に植民地を建設しようとした。1820年3月16日には、国王ジョアン六世が移民促進の勅令を出している。

ゲオルク・アントン・フォン・シェッファー（Dr. Georg Anton von Schäffer）は、ブラジル政府の委託を受けて、オーストリアやドイツから

の移民を募集する斡旋をおこなった人物であった。ブラジル王国首相のジョゼー・ボニファシオ・デ・アンドラーダ・エ・シルヴァがシェッファーに委託したのは、本来、ポルトガルに対する独立戦争に備える傭兵をドイツ連邦で募集することであった。だがミュナーシュタット出身のシェッファーは、ロシアのツァーリ体制下で働いた経験があり、ロシアのコザック兵のあり方を熟知していた。このため彼は首相と協議して、単なる傭兵を募集するのではなく、コザック兵の体制に習って、国境地帯の警備を固める屯田兵的な入植者を募集することにした。これはオーストリアでもトルコ人の侵入を警戒するために、ハンガリー国境に、緊急時には兵士として戦うドイツ人入植者を配置したのと同様のやり方であった<sup>2</sup>。

ブラジル南部ではアルゼンティンとの紛争があり、1828年にウルグアイがブラジルから独立するという事態もあって、ブラジルの南部を軍事的に強化することは、新生ブラジルの大きな課題であった。

こうしてシェッファーはドイツ各地を回り、ブラジル移民の募集に努めた。ドイツの政府や警察からはドイツの労働力を引き抜く詐欺師まがいの危険人物として警戒されたようであるが、オーストリア王女の嫁ぎ先であり、温暖な気候と、自由な新天地という宣伝などが有効であったようで、着実に成果を上げた模様である。

例えば、1822年12月にはアルテングラン出身のペーター・ラインハイマー (Peter Reinheimer) は、クーゼルの警察署に、「以前から、私は当地においてはもはや四人の子供を養っていくことはできぬと考えるようになり、ますます悪化する時代に、とうとう乞食同然の暮らしに陥り、それを続けなければなりません。それゆえに妻と四人の子供をつれてアメリカのブラジルへ移住する決意をいたしました」という、「恭順なる嘆願書」を提出し、ブラジルへの移住の許可を求めた<sup>3</sup>。

---

2 Oberacker, a.a.O., S.184f.

3 Roland Paul, Ziele der Auswanderung-Brasilien, [http://www.auswanderermuseum.de/deutsch/start\\_d.htm](http://www.auswanderermuseum.de/deutsch/start_d.htm)

国王ジョアン六世は新生ブラジルの国家建設もあり、ナポレオン支配の崩壊後もブラジルにとどまっていたが、ポルトガル王家の相続問題もあって、1821年にリスボンへ帰還した。ペドロ王子が総督としてリオに残ったが、ポルトガルからの独立を促進する勢力と手を組んで、王子は1822年9月7日、「ブラジル帝国」の独立を宣言した。同年10月12日に王子は「ドン・ペドロ一世」と称して正式に皇帝の座についた（在位1822-31）。

だが「独立」はしたものの、ペドロは同時にポルトガルの王位継承者でもあり続け、ポルトガルとの関係は断ち切られていなかった。1826年に父ジョアン六世が死去すると、ペドロはポルトガル王室を継承した。しかしブラジルを離れることもできないので、ポルトガルの王位をすぐに幼い娘マリア・ダ・グローリア（後の女王マリア二世）に譲った。だが結局この二股をかけた中途半端な立場のため、ブラジル国民からの信頼を十分に得ることができず、皇帝は1831年に退位して、5歳のブラジル生まれの息子（ペドロ二世）に王位を譲り、ポルトガルへ帰った。

しかしこのような「独立」であっても、外国人移民にとっての二つの重要な前提条件（鎖国の解除とポルトガルからの独立）が整ったことには変わりはなかった。ここに新しい移民の時代が始まるのである。ブラジル政府は移民の促進へ向けてさまざまな措置を取った。1824年3月25日、新皇帝ペドロ一世はブラジルに憲法を制定し、この憲法で宗教の自由が認められた。つまりカトリック信者以外の外国人移民も可能となったのである。

ブラジル側の移民促進政策の主要な目的としては、次のような点が上げられるであろう。

1. 独立国として、労働力の確保による生産性の向上（サトウキビ、綿、コーヒーなどの生産）と広大な未開地の開拓
2. 奴隷制廃止論の高まりをかわし、奴隷に代わる労働力を確保すること
3. 南部の国境の警備（アルゼンティン、パラグアイとの国境紛争への対処）

次に、ドイツ側から見て、19世紀に多くのブラジルへの移住者を出した

理由はおもに次のような点にあったのではないだろうか。

1. 産業革命による労働人口の流動化
2. ヨーロッパにおける飢饉や経済恐慌による経済不安定化
3. ブラジルでの広大な土地の提供、渡航費の支給などの勧誘
4. 小作人や被雇用者としての生活から、土地所有者、自営業者になれるという期待
5. アンシャン・レジームのメッテルニヒ体制をのがれ、憲法を制定したより自由なブラジルの政治体制への期待

19世紀の中葉においては、ヨーロッパからブラジルへ渡るのは帆船による長期間の航海を前提としており、このため、出稼ぎ目的で何度も往復するという状況はあまり考えられず、上に述べたヨーロッパ出国の理由からしても、ブラジルに永住すること、つまり自らの力で新しい大地に自らの住居を構え、独立した経済の新天地を確立し、子孫のために新しい故郷を獲得することを目的としてブラジルへ移住した人が圧倒的多数であったと思われる<sup>4</sup>。

前述の1810年代の植民地建設の試み（1818年のバイーア州レオポルディーナとサン・ジョルジュ・ドス・イレウス、1819年のリオ州ノーヴァ・フリブルゴ）は十分な準備が整っておらず、大規模農地で黒人奴隷と変わらないような受け入れ態勢であったようで、失敗に終わった。

1820年代になると、新しいタイプの植民地が登場し、その後の移民のモデルになるケースが生まれ始めた。これは従来の植民地時代の大規模農場経営のスタイルから脱却し、(1) 比較的小規模の自営農地、(2) 黒人奴隷を使用しないこと、(3) 商工業と農業のコンビネーションなどを特徴とする植民地である。このような新しい路線の植民地として、1824年7月25日、ドイツ人37人がリオ・グランジ・ド・スウのサン・レオポルドに入植した。

---

4 Oberacker, a.a.O., S.186.

サン・レオポルドへの入植者は、モーゼル、フンスリュック、ラインヘッセンからの移住者が多数であった<sup>5</sup>。これまでの失敗例と違い、この植民地は定着したので、後にこの日がドイツ人の「移民の日」と制定されることとなった。

ポルトガル植民地時代スタイルの黒人奴隷労働を基盤とする農場経営と社会的に一線を画すことがこの新しいタイプの植民地では決定的に重要であったようである。このためドイツ系の「閉鎖的」な風土が生まれることにもなった。初期に入植したドイツ人たちはドイツ語で生活し、自分たちの教会や学校を作り、独自の共同社会を作り上げたが、それは奴隷制に白人社会が安住することに歯止めをかけるためでもあった。すでに1824年には、ノーヴァ・フリブルゴとサン・レオポルドに最初のドイツ・プロテスタント教会が設立されている。

1820年代から1920年代までのブラジルへの移民を出身の国別に見ると「表1」のようになる。この表を見れば、外国人移民の初期の段階ではドイツ移民が非常に多いことが分かる。絶対数は少ないものの、19世紀前半(1820年から1849年まで)の合計では移民数の合計16,757人の実に31.8%(5,330人)がドイツの出身である。ドイツ人移民はブラジルへの移民のパイオニア的な役割を果たしたといえよう。1870年代からあとはコーヒーブームに乗って、大量の移民がイタリアやポルトガルから流入するために、ドイツ移民の相対的な数値は大きく後退するが、それでもコンスタントに多数のドイツ人が移住し、第一次大戦後にはかなり増加していることが注目される。

ブラジル国内の地域という観点から見ると、19世紀の入植者はブラジル南部に集中しているが、これには気候的に南部の方がヨーロッパの気候に近く生活しやすいという理由のほかに、アルゼンティンやウルグアイに対する国境警備的な意味もあったようである。しかし重要なことはポルトガ

---

5 Oberacker, a.a.O., S.185.

表1 ブラジルの外国人入移民数<sup>6</sup>

	ポルトガル	イタリア	ドイツ	スペイン	日本	その他	計
1820-29	0	0	2,984 (32.8%)	0	0	7,112 (78.2%)	9,096
30-39	261 (9.8%)	180 (6.7%)	207 (7.8)	0	0	2,021 (75.7)	2,669
40-49	491 (9.8)	5 (0.1)	2,139 (42.8)	10 (0.2%)	0	2,347 (47.0)	4,992
50-59	63,272 (58.5)	24 (0.02)	15,806 (14.6)	181 (0.2)	0	28,843 (26.7)	108,126
60-69	53,618 (48.7)	4,916 (4.5)	16,514 (15.0)	633 (0.6)	0	34,398 (31.2)	110,079
70-79	67,609 (34.9)	47,100 (24.3)	14,627 (7.5)	3,940 (2.0)	0	60,609 (31.3)	193,885
80-89	104,691 (23.1)	276,724 (61.1)	19,201 (4.2)	29,066 (6.4)	0	23,997 (5.3)	453,079
90-99	215,354 (18.2)	670,508 (56.7)	17,034 (1.4)	164,193 (13.9)	0	115,929 (9.8)	1,183,018
1900-09	195,586 (30.8)	221,394 (34.8)	13,848 (2.2)	121,604 (19.1)	861 (0.1%)	82,145 (12.9)	635,438
10-19	318,481 (36.9)	137,868 (16.0)	61,902 (7.2)	181,659 (21.0)	27,432 (3.2)	136,374 (15.8)	863,714
20-29	301,913 (35.7)	106,835 (12.6)	75,801 (9.0)	81,931 (9.7)	58,284 (6.9)	221,881 (26.2)	846,645

ル植民地時代は海岸に近い地域だけが開発されていたのに対して、ドイツ系植民地が内陸部まで建設され、ブラジルの内陸部開拓に大きく貢献したということである。オーバーアッカーが指摘しているところによれば、「ポルトガル人は、農業や都市建設に努力したとしても、(……) ザリガニのように海岸線にしがみついていたのであり、内陸部へと進んで行ったことといえば、軍事、牧畜、金鉱探し、インディアン狩りだけであった。これに対してドイツ系の入植者たちは家族とともに内陸部に進み、ある場合には想像を絶するほどの肉体的、経済的、文化的窮乏に耐えて、これまでま

6 ブラジル日本移民80年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』（以下『八十年史』）、ブラジル日本文化協会、サン・パウロ、1991年、p.22参照。



ったく無視されてきた原始林を開拓したのである。」<sup>7</sup>

1824年の「移民の日」から100年の間にドイツ系移民は約24万人にのぼった。この間にヨーロッパに帰った人や、アルゼンティンなど他国へさらに移住した人もいたに違いないが、ブラジルに定着したドイツ系住民も多く、何世代も経過した1940年代には数百万人のドイツ系住民がブラジルにいたようである<sup>8</sup>。

初期のドイツ人の入植した地域は南部の3州が中心であった。1829年5月、リオ・ネグロ（現パラナ州）にドイツ移民17家族が入植した。ヴィルヘルム・フークマンの記述ではこのリオ・ネグロへ最初に入植した家族の状況は次のようなものであった。

ドイツ人家族たちは1828年中ごろ、ブレーメンから出航し、帆船「シャルロッテ・ルイーゼ」号で約100日航海の後、リオ・デ・ジャネイロに到着、ジョアン・シルヴァ・マシャード（のちのアントニーナ男爵）が所有するリオ・ネグロへ入植することとなった。11月30日、サントスから船で移動し、パラナグアに12月7日に着いた。その後、アントニーナ、クリティバ、ヴィラ・ド・プリンシピ（現在のラパ）を經由して1829年2月6日にリオ・ネグロに到着した。20家族105名（大人45名）であった<sup>9</sup>。リオ・ネグロへの第二陣の入植者たちは、1829年5月23日サントス到着、パラナグアに5月28日に着き、7月から9月にかけてリオ・ネグロに入植した。31家族142名（大人59名）であった。リオ・ネグロがサン・パウロ地方（当時）への第一号植民地で、サント・アマーロが同地方第二号植民地であった。ここには、同年6月29日、91家族のドイツ移民が入植した<sup>10</sup>。

サンタ・カタリーナ州では、フロリアノポリス島の対岸に、1829年にサン・ペドロ・デ・アルカンタラが最初の植民地として建設された。同地の

---

7 Oberacker, a.a.O., S.222.

8 Vgl. Nicolas Forster, Deutsche in den USA und Brasilien während des zweiten Weltkrieges, in: <http://www.hausarbeiten.de/faecher/hausarbeit/gec/19292.html>

9 Wilhelm Fugmann, Die Deutschen in Parana, Curityba, 1929, S.12.

10 Fugmann, a.a.O.

ドイツ系入植者は、早くからブラジルに定着し、その後ドイツ系ブラジル人の政治家を輩出した。ラウロ・セルヴィアーノ・ミュラー (Lauro Severiano Mueller, 1863-1926) (サンタ・カタリーナ州知事)、フィリップ・シュミット (Philipp Schmidt) (サンタ・カタリーナ州知事)、ラウリーノ・ユリウス・アードルフ・ホルン Raulino Julius Adolf Horn (州知事、フォロリアナポリス市長) らがとりわけ著名な政治家たちである。

1831年、皇帝ペドロ一世は、幼い息子 (5歳) ドン・ペドロ二世にブラジル王位を譲った (在位1831-1889)。ペドロ一世はポルトガルに帰り、ジョゼ・ボニファシオがブラジルの摂政職を務めたが、7年間に摂政が4回交代するという不安定な情勢が続いた。

ドン・ペドロ一世の退位は、この国王がポルトガル王の王位継承者でもあったという理由で、ポルトガルからの独立性を明確にしようとするブラジル独立主義者の勝利であるが、同時にそれはブラジルの大土地農業経営者の勝利でもあり、外国からの移民を排除し、排他的な体制を確立しようとする保守排他主義の勝利でもあった。こうした流れの中で、ドイツからの移民の募集活動を行ったシェッファーは1828年にその委託業務を解任された。さらに1830年12月15日には法律によって外国からの移民は一時的に禁止された。このため30年代40年代にはドイツからの移住も含めて外国からの移住は大きく減少する。もっとも30年代のブラジルは国内動乱の時期で、移民禁止の法律が遵守されたわけではない。

1834年憲法補足令で、移民に関しては中央政府から地方政府が取り扱う課題となった。その背景には、こうした処置によって移民を縮小し、旧来型の奴隷制大規模農業経営を継続しようとする大土地所有者の意向が働いていた。地方政府は外国から移民を呼び寄せる資金を十分に持たなかったからである<sup>11</sup>。

一方で、大規模農園は労働力不足に悩むようになっていた。19世紀中葉

---

11 Oberacker, a.a.O., S.193.

にブラジルにおけるコーヒー生産は急速に発展する。世界のコーヒー生産におけるブラジルの割合は、1820年代の18.2%に対して、1840年代には40%と倍増し、50年代には52%と世界のコーヒーの半分以上がブラジルで生産されることになる。コーヒー生産はこの時期にブラジルの最も重要な産業分野となった。ブラジルの全輸出額に占めるコーヒーの割合は、1820年代に18%であったのが、40年代には41%、80年代には62%にまでなった<sup>12</sup>。しかしイギリスなどから奴隷制廃止の圧力が強まったこともあり、労働力不足は深刻な問題となった。そこで、いずれ奴隷労働力に依存した経営は行き詰ることを予想した一部の大地所有者は奴隷に代わる労働力としてヨーロッパから「白い働き手」(ブラソス)を導入しようと考えられるようになった<sup>13</sup>。

自ら大農場経営者で、上院議員でもあったニコラウ・デ・カンポス・ヴェルゲイロは、ヨーロッパからの移民に無償で土地を提供して自営農業を促進してきた初期の移民政策に反対して、大規模農園経営者のコーヒー農園への「契約移民」を政府が援助するように働きかけ、この移民政策の転換を実現させた。1841年にヴェルゲイロは、リメイラにあった彼のコーヒー園イビカバ農場にポルトガル移民90家族を導入した。サン・パウロのコーヒー移民の最初のものである<sup>14</sup>。

このように、19世紀の中葉でのブラジル移民の性格には2つの流れがあった。(1) 小規模な農地で自営農に従事する移民、そして(2) ポルトガル人の大規模農業経営者のコーヒー園における契約労働移民である。後者は1841年に始まり、初期にはさまざまな問題が発生したが、19世紀後半にはコーヒー生産の増加とともに移民の主流となった。

1841年のイビカバ農場のポルトガル人契約移民は、奴隷と変わらない労

---

12 山田睦男『概説ブラジル史』有斐閣、1986年、p.122参照。

13 Oberacker, a.a.O., S.193.

14 サンパウロ人文科学研究所編『ブラジル日本移民史年表』(以下『年表』)、無明舎出版、1997年、p.8

働環境や経営者側の契約無視のため定着せず、失敗に終わった。しかしこの失敗にもかかわらず、1846年に、ヴェルゲイロ上院議員は政府の資金を得て、2回目の契約労働移民としてドイツ移民80家族をイビカバ農場に導入した。だがこれも失敗に終わった<sup>15</sup>。奴隷と同じ労働、生活条件の厳しさにヨーロッパ出身の移民たちは耐えることができなかった。奴隷制度に対する国際的な廃止論の圧力は高まっていたが、キューバとブラジルは世界でもっとも遅くまで奴隷制を残した国で、1830-50年にはまだ40万人以上の黒人奴隷が「輸入」されていた。奴隷制がブラジルで完全に廃止となるのはようやく1888年のことであった。

## 2. 19世紀中葉におけるドイツ移民

1840年、ペドロ二世が14歳で皇帝に即位し、第二帝政は1889年まで続いたが、この時期に南部ブラジルを中心に多くのドイツ人入植地が建設された。中でもサンタ・カタリーナ州北西部にブルーメナウ（1850）、ジョインヴィレ（1851）、ブルスク（1860）が相次いで作られ、お互いに約100kmの距離にあったので、ドイツ系植民地の三角地点を形成することとなった。

1850年9月2日に入植が開始されたブルーメナウ植民地は、民間植民地のモデル・ケースとされ、代表的ドイツ系植民地である。この植民地への入植がどのように行われたのか、モデル・ケースとされるのはどのような特徴を持っていたためなのかについて、検討してみたい。この植民地を指導したのは、後にその名前が町の名前にもなった開拓者のヘルマン・ブルーノ・オットー・ブルーメナウ（Hermann Bruno Otto Blumenau, 1819-1899）<sup>16</sup>であった。ヘルマン・ブルーメナウは1819年12月26日、ハルツの

---

15 『年表』 p.9

16 ブルーメナウに関してはおもに次の資料を参照した。José Ferreira da Silva, Hermann Blumenau, in: <http://www.blumenau-gesellschaft.de/Blumenau/Homepage/Startseite.html>

ハッセルフェルデに上級森林官カール・フリードリヒ・ブルーメナウ (Karl Friedrich Blumenau) と妻クリスティアーネ・ゾフィー Christiane Sophie (旧姓ケーゲル Kegel) の第7子として生まれた。1832年にブラウンシュヴァイクのギムナジウムに入学したが、父親の意向で1836年10月に薬剤師としての道を進むことになり、ブランケンブルクのハンペ薬局で見習い修行を始めた。1837年からはエルフルトのコッホ薬局で見習いを続け、1840年に薬剤師の見習い期間を終了した。しばらく故郷に滞在した後、1841年からエルフルトの化学工場で勤務するようになった。工場の経営者ヘルマン・トロムスドルフ (Hermann Trommsdorff) からブルーメナウは高く評価されたようで、この経営者の家に入出入りすることが許された。そこで彼は世界探検家で自然科学者であるアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859) や自然科学者のフリッツ・ミュラー (Fritz Müller, 1821-1897) と知り合うようになった。未知の自然や風土がまだ多く残っている南米の魅力について、フンボルトなどから話を聞き、若いブルーメナウはこの未知の大陸で将来は働きたいという夢を持つようになったようである。トロムスドルフの会社のために新しい特許を取得し、販売認可を得るために、ブルーメナウは1844年にロンドンへ派遣され、そこでプロイセン国の在ブラジル総領事であったヨーハン・シュトゥルツ (Johann Sturz) と知り合い、ブラジルへの関心を強めるようになった。ロンドンからの帰国後、ブルーメナウはエルランゲン大学の薬学部に入学し、1846年3月23日、薬学の学位を取得した。1週間後の3月30日には彼は帆船「ヨハネス」号に乗り込み、ブラジルに向かった。

1848年までの間、ブラジルの調査を行い、サンタ・カタリーナのイタジャイ川流域の土地を開拓地として選び、220平方キロの土地をブラジル政府から与えられた。ブルーメナウはいったんドイツへ戻り、共同開拓者の募集活動を行った。1850年、再びブラジルへ渡り、同年9月2日に16名の仲間と植民地を開設した。

この入植地はモデル・ケースとして知られるが、はじめから何事も順調

に発展したわけではない。1850年の時点では、ブルーメナウは大規模農業経営を試みたが、これは失敗し、1852年から新たな入植者を迎えて、小規模農業経営に切り替えた。1852年末には、104名の入植者を数えた。その後8年間は、微々たる成長であった。1855年、イタジャイ川が14mの水位に達する大洪水となり、トウモロコシ、マメ、サトウキビといった農作物は壊滅的な被害を受けた。このときの様子について、「私は通常決して軟弱な性格ではないのですが、そこへ行って見渡す限り全滅の様子を見たとき、私は子供のように泣き出すのをとめることはできませんでした」とブルーメナウ自身が手紙に書いている<sup>17</sup>。

しかし親から相続した遺産をこの植民地建設につぎ込んだブルーメナウの熱意と、入植者たちの努力によって、この植民地は着実に発展した。1860年にはブルーメナウの個人的な資金は底をついたが、民間植民地からブラジル政府の植民地へと転換することで乗り切った。ブルーメナウは同年1月13日、植民地をブラジル政府に引き渡す協定に署名し、政府はブルーメナウをこの植民地の管理者に任命した。この時点でこの入植地は947人の住民を数えた。

政府管轄の植民地となってからブルーメナウの人口は急速に膨張する。1870年には、5,986名がブルーメナウに住み、1875年の資料では、住民の75%がドイツ語圏の出身者で、イタリア系が18%、ポルトガル系が10%で、宗派は61%がプロテスタント、39%がカトリックであった。このように1875年以降イタリアからの移民が急増するまでは、ドイツ系の移住民が圧倒的多数を占めていた<sup>18</sup>。

1880年2月4日、市制施行となり、町の名前はブルーメナウと制定された。この植民地創始者のブルーメナウが初代市長となった。1883年には、とりわけイタリアからの移民が増加し、市の人口は17,000名となった。

---

17 Brief Blumenau, in: Dr. Hermann Blumenau, A Colônia Alemã Blumenau (Deutsche Kolonie Blumenau), Blumenau 2002, S.137.

18 Oberacker, a.a.O., S.200.

1884年8月15日、ヘルマン・ブルーメナウは情熱を傾けてきたブラジルの地を離れ、ドイツに帰国した。彼は晩年をドイツで過ごし、1899年10月30日、ブラウンシュヴァイクで生涯を閉じた。

開拓指導者のヘルマン・ブルーメナウがブラジルを去ったあとも、ブルーメナウ市はドイツ系の植民地としての性格を維持した。たとえば、1905年におけるブルーメナウ地域の学校授業の言語別の学校数を見てみると、全112校中、ドイツ語のみ81校（72.3%）、イタリア語のみ17校（15.2%）、ドイツ語とポルトガル語5校（4.5%）、ドイツ語とポーランド語4校（3.6%）、ポルトガル語のみ4校（3.6%）、ドイツ語とイタリア語1校（0.9%）であった<sup>19</sup>。つまりドイツ語を使用している学校は91校（81.3%）にのぼり、ポルトガル語の学校よりも圧倒的に多いのである。

このようにドイツ系住民が定着し、この地で生まれ育ったドイツ人が出現するようになると、これらのドイツ系ブラジル人にとっては、たとえドイツ語で生活していてもこのブルーメナウが自分たちの故郷となった。そうした雰囲気をルードルフ・ダム（Rudolf Damm）の「わが生家」（Mein Vaterhaus）という詩は表現している。作者は、長年ブルーメナウで教師をしていた人で、この詩は1915年の『在ブラジルドイツ人のためのカレンダー』に掲載されたものである。

わが生家

ルードルフ・ダム

青き水、そこから高く続くのは、  
美しき、輝く、優美の大地なり。  
原始なる森の衣装もすばらしい、  
地上にはこれに優れる土地はなし。  
オレンジの林の陰に見えるのは、

---

19 [http://de.wikipedia.org/wiki/Blumenau\\_\(Brasilien\)](http://de.wikipedia.org/wiki/Blumenau_(Brasilien))

あれこそが、わが愛しき生家なり。

緑なる この草原は 新しく  
北国の金髪男児の故郷なり。  
大自然 休みも知らず働いて、  
すばらしき多くの実り もたらせり。  
花束に隠れるごとく、そこに立つ、  
あれこそは、わが愛しき生家なり。

朝が来て、輝く光 射しこめり、  
鳥たちは 新しき日に 挨拶す。  
森からは 静かな谷を 通り行き  
遠くへと 響き渡れる、斧の音。  
すばらしき朝に向いて、われは出る  
それこそは、わが愛しき生家なり。

いそがしく古いも若きも手を伸ばし  
たくましく仕事に精出す人ばかり、  
畑にも、野原に、牧場、森にても。  
流れ出る苦しき汗も心地よい。  
幸せな夜が来るとき、帰途に着く、  
それこそは、わが愛しき生家なり。

清らかに小川は流れ、風そよぐ、  
果物は熟してたわわに実をつける。  
日の光 あたりにあふれ、花におう。  
心配も苦悩も知らず 日々過ごす。  
どこよりも、この土地こそが故郷なり。



これこそは、わが愛しき生家なり<sup>20</sup>。

ブルーメナウへのドイツ人入植者は農業従事者ばかりではなかった。農業用器具の生産や修理を行う鍛冶屋など技術を持った職人たちもいた。ケムニッツ出身のヘリング兄弟は、1879年にトリコット生地を生産工場を設立し、現地で調達する原料で事業に成功した。この工場は現在でも存続し、ブラジルを代表する生産工場となっている。

ブルーメナウの入植は多くの定着者を生み出し、移民の成功例とされるが、ここでその要因についてまとめておきたい。ドイツ移住民が定着したことの理由として、ここでは奴隷制に依存した大規模植民地農法ではなく、自営的な小規模農業が行われたという点が最も重要であると思われる。ポルトガル植民地時代の奴隷制に基づいた経営法からの転換は、ドイツ語の使用、ドイツ人学校、プロテスタント的倫理観という「隔離されたドイツ的社会」、「閉ざされた社会」によって実現されたといえよう。また農業経営が、当時のヨーロッパの比較的高いレベルの技術を伴った商工業活動と結びつき、基本的に自立した都市社会の構造が打ち立てられてことも、ブルーメナウの特徴として指摘することができよう。

ブルーメナウ以外でもブラジル南部の各地にドイツ系の入植地が建設された。主要なものをあげておきたい。

リオ・グランジ・ド・スウ州においては、1824年から89年の間に、97のドイツ系入植地が建設された。1855年に、サン・レオポルドは12,000人の住民をかかえていた。サン・レオポルドの西にモンテネグロ（1840年）、さらに西方にサンタ・クルス（1849年）の入植地が開設された。東にはムンド・ノーヴォ、北にノイ・ペトロポリス（1859年）、中でもサンタ・クルスは模範的な成長をして、1872年には5,809人、1890年には15,572人の住民をかかえた。この地の住民は、最初の入植地サン・レオポルドの出身者

---

20 Gertrudes Scheltzke, *Patria, Heimat, Blumenau*, 2004, S.33f.

もいたが、大半は、ラインラントやポンメルンから移住してきた新たな移民であった。1858年にはヤーコプ・ラインガンツによって、サン・ロレンソの植民地が開拓され、第一陣はラインラント出身者が、それに続いてポンメルン出身者が入植した<sup>21</sup>。

サンタ・カタリーナ州のブルーメナウについては前述したが、同州においては、すでに1828年に、サン・ペドロ・デ・アルカンタラが開拓された。1847年にサンタ・イザベル入植地ができ、フンスリュック出身者、その後ヴェストファーレン出身のドイツ人が入植した。ブルスク（当初はイタジャイという名前であった）は、1860年にブルーメナウの南に54家族のドイツ人が入植して開拓が始まった。出身地はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン、ポンメルン、バーデンが多く、1867年には1,458名の住民を数えた。ジョインヴィレ（当初の名はドンニャ・フランシスカ）は1851年に建設された。皇帝ドン・ペドロの姉の夫であったジョインヴィレ（フランスの貴族出身者）王子の土地であったが、王子がヨーロッパに亡命し、ハンブルク植民協会<sup>22</sup>が王子からこの土地を買い取り、ドイツ人が入植することになったのである。プロイセン、オルデンプルク、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン、ハノーファー、スイスの出身者が中心であったが、ここにはドイツを政治的な理由で離れた知識人、貴族、将校らが大勢入植した。他の植民地と違って、農民層の入植ではなかったことが特徴で、このため商工業や文化が発展した。1856年には1,428人の入植者であったが、1880年には18,000人に増加した。ジョインヴィレの西部にはサン・ベント植民地が作られた。ここにはボヘミア（ズデーデン）地方出身者が比較的多かった<sup>23</sup>。

こうしたドイツ系の植民地ではドイツの新聞が発刊されるようになった。

---

21 Oberacker, a.a.O., S.194ff.

22 この協会は1849年にクリスティアン・マティアス・シュレーダー Christian Matthias Schroederによって創立された。

23 Oberacker, a.a.O., S.198ff.

リオ・グランジ・ド・スウでは1854年に最初のドイツ移民の新聞が発行された。

一方、多数の移民が送り出されるようになって、その歯止めをかけようとする動きも見られるようになった。その理由はさまざまであるが、その一つは悪質な斡旋業者が横行し、出国前に約束したことと実際とはまったく違っていたという事例が続出したためである。また契約農場労働者が奴隷と同じような扱いを受けたということもあって、ブラジルは奴隷制度をまだ採り続けるひどい国であるというイメージがヨーロッパに広がった。ブラジル移民の実態調査などがドイツ本国に伝えられ、そこで労働・生活条件の厳しさ、黄熱病などの熱帯特有の伝染病の危険性が強調されたこともあって、1859年に、プロイセン政府は「ハイト」法（das Von-der-Heydtsche Reskript）を制定して、ブラジル向け移住を禁止した。この法律は1871年のドイツ帝国建国以後も引き継がれ、ようやく1896年に、南3州向けの移住だけは認められることとなった。

悪質な斡旋業はその後も後を絶たなかったようで、20世紀になってオーストリアからの移民の一人は次のように報告している。

「1925年に私たちオーストリアの8家族はオランダの王立ロイド社の蒸気船フランドリア号でアムステルダムから出航しました。ウィーンの代理業者は快適な鉄道と船の旅を約束していましたが、事実はまったくその逆でした。（サン・パウロで）二人の自称ハンガリー人の大農場労働者というのが部屋にやってきて、コーヒー農場での生活と稼ぎのよさを褒め称えました（サクラでした）。オーストリアとドイツの家族はサン・パウロ州南部のドイツ人植民地に入植できると聞かされていたのですが、（……）（私たちが）到着したのはミナス・サラエスのはずれのコーヒー農場で、この農場でドイツ語を話すものは誰一人いませんでした。」<sup>24</sup>

「ハイト法」やドイツ国内における反ブラジル宣伝によって、19世紀後

---

24 Ursula Prutsch, Brasilien 1889-1985, S.9, in: <http://www.lateinamerika-studium.at>

半には、ドイツ系ブラジル移民は減少傾向となった。1859-1889年の30年間にリオ・グランジ・ド・スウ州に入植したドイツ人は、約16,000人に減少した。もっとも「ハイト法」は、ブラジル政府による公的なブラジル移民を禁止しただけで、個別にはオランダなどを經由してブラジルへ行くことは可能であり、実際にこの間にドイツからのブラジル移民がなくなったわけではない。「表1」で見る限り、ブラジル全体では、イタリア移民などが急増するので、それに比べてドイツ移民は相対的な比率は大幅に減少するものの、絶対数ではかなりの数の人々が持続的にドイツからブラジルに移住している。

このようにブラジル移民がつづき、それまでに移民した人たちの子孫も増え、19世紀後半にはブラジルに定住するドイツ人はかなりの数になり、ドイツ系の学校の数も増加した。パナラ州のドイツ人学校の設立の模様をここで紹介しておきたい<sup>25</sup>。パナラ州では1869年に、クリティバに「ドイツ学校」（後のコレギオ・プログレッソ）が設立された。1884年までこの学校は、プロテスタント教会の運営で、牧師によって教育が行われた。この学校とは別に個人が運営する私立学校もいくつかあった。ラッシュエンデルファー（Raschendoerfer）、ミュラー（Mueller）、フィンケンジーパー（Finkensieper）、アウスト（Aust）、シュミット（Jh. Schmidt）、オファー（Offer）、ヘルツベルク（Herzberg）、クリュックマン（Krueckmann）の学校は規模も小さくそれほど長続きしなかったようである。マティルデ・マイスナー（Frau Mathilde Meissner, geb. de Drusina）の学校がもっとも長く続いた（1874-1893）。

プロテスタント教会運営の「ドイツ学校」は、1884年に学校協会設立（諸宗派共同）の学校となり、プロテスタントとカトリックの両方の宗教授業が行われた。1893年に宗教の授業を廃止することになり、このためプロテスタント学校1校とカトリック学校2校（1896年にドイツ系カトリック男

---

25 パナラ州の学校については、Fugmann, a.a.O., S.85ff. を参考にした。

子学校 Collegio Bom Jesus と女子学校 Collegio da Divina Providencia) がこの学校とは別に設立されることになった。プロテスタント学校は、その後「ドイツ学校」(コレギオ・プログレッソ)で宗教の授業が再開されるようになったとき、閉校となった。

この「ドイツ学校」(コレギオ・プログレッソ)の生徒数は、1893年349名、1912年390名、1915年479名、1916年498名であった。1917年10月、第一次世界大戦で、ブラジルがドイツに宣戦布告したとき、名前を「ドイツ学校」から「コレギオ・プログレッソ」と変え、学校を存続させようと学校側は努力したが、1年半の間、学校閉鎖となった。1917年10月28日から30日にかけて、反ドイツのブラジル愛国主義者たちがドイツ人学校の建物を襲撃し、大きな被害を与えた。学校は1919年7月15日に生徒数102名で再開され、この年の年末には生徒数287名に回復した<sup>26</sup>。

学校閉鎖、学校襲撃という事態を見れば、ドイツ系住民の居住環境とブラジル愛国主義とがいかに対立していたかが伺われる。閉鎖前と再開後では生徒数は5分の1に減少した。1921年の生徒数は359名(男子247名、女子112名)で、300名がドイツ語使用者、42名がドイツ国籍、307名がブラジル国籍、10名がその他の国籍であった。1929年の時点で、コレギオ・プログレッソは8クラス、授業はプロイセンの中等教育に準拠したものであった<sup>27</sup>。

1915年、福音ルター幼稚園が開設され、1928年に30名(男子12名、女子18名)の園児が通園していた。

1928年段階でのパラナ州におけるドイツ系学校の設立、状況生徒数の数などは「表2」に示すとおりである<sup>28</sup>。

---

26 A.a.O., S.87.

27 A.a.O., S.88.

28 A.a.O., S.93ff.

表2 パラナ州におけるドイツ系学校（数値は1928年のもの）

(\*独語生徒数とはドイツ語を通常の使用言語とする生徒の数)

所在地	設立年	学校名・ 設立母体	生徒数	男子	女子	独語 生徒 数*	生徒の宗派			備考
							新教	旧教	正教 他	
Curityba	1869	ドイツ学校、 新教教会	414	265	149		248	166	17	1884年から教育協会が運営。 1917年から校名は Collegio Progresso
	1896	Collgio Bom Jesus	298	298		229	62	199		カトリック系男子校
	1896	Collegio da Divina Providencia	382		382	345	159	219	4	カトリック系女子校
	1927	工業専門学校	12	12		12	12			15歳以上の男子生徒への夜間 授業
Lapa	1892	新教教会	36	23	13		26	10		1926年から教育協会が運営
Mariental	1903		56			53		56		カトリック系ヴォルガ・ドイ ツ人入植地、1903年からドイ ツ人教師の教育
Rio Negro	1903	Collegio S.Jose	294			176	39	255		カトリック系
	1923	Collegio Seraphico	134			69		128	6	プロイセンの人文系ギムナジ ウム準拠の教育(8クラス)、 教員数16
	不明	(ドイツ系学校)	70			55	54	16		4クラス
Passa Tres	1896		45			30	2	43		
Ponta Grossa	1894	新教教会	50			50	40	10		1928年から学校援助会が運営
Castro	1896	ドイツ統一会	28			27	19	9		Deutsche Einheit、5クラス
Caxambu	不明		21			12	12	7	2	
Quero-Quero	1882	新教教会	36			29	29	7		ヴォルガ・ドイツ人入植地
Papagaios Novos	1886	新教教会	48			48	47	1		ヴォルガ・ドイツ人入植地
Imbituva	1895	新教教会	40			40	39		1	3クラス
Bom Jardim	1923	私立学校	22				18	2		
Iraty		教育協会	34				25	7	2	
Victoria	1927		50			38	31	19		
Concordia	1927		18			18		18		
Independencia	1925		16			16	9	7		
Encantilado	1926		32				16	16		
Iracema-Str.	1926		16				9	7		
Linha Parana	1927	新教教会	25				13	2	10	
Victoria-Str.	1928	教育協会	31							
Strasse Rio da Areia	1927	教育協会 「団結」								
Esperanca	1928		20				9	11		
Serra Negra	1927		11				6	5		

次にリオ・グランジ・ド・スウ州の学校についてであるが、ドイツ人の入植が始まった1820年代には広大な州全体で7ないし8の公立学校があっただけである。1846年に植民がある程度軌道に乗ったサン・レオポルドで公立学校数2（生徒数32）と私立学校数13（生徒数490）であった。1858年に公立学校数3に対して、私立学校数27であり、このような数字からブラジル政府が入植者の家族に対して十分な公的教育を提供することができず、入植地で多くが私立学校に通わなければならなかったことが判明する<sup>29</sup>。

初期の小さなドイツ人入植地のドイツ系学校は施設などの教育条件はまったく貧弱であったが、それでもこうした学校の中で育ったドイツ系の児童の中から、植物学者のフレデリコ・カルロス・ヘーネ（Frederico Carlos Hoehne）、民族学者のエーゴン・シャーデン（Egon Schaden）、植物学者バルドゥイン・ランボ（Balduin Rambo）、歴史学者ルイス・ゴンサガ・イエーガー（Luis Gonzaga Jäger）、化学者マクシミリアン・ホムリヒ（Maximilian Homrich）という著名な学者たちが育った<sup>30</sup>ということは、内容的に充実した教育が行われていたことを示すものといえよう。

19世紀後半のブラジル社会は、奴隷制の廃止へ向けての流れによって大きく変動した。すでにイギリスなどの圧力により、奴隷制は大きな制限を受けていた。ブラジルは1817年にイギリスと奴隷貿易の制限のための協定を締結したが、これは赤道以北の奴隷貿易を停止させるというだけで、赤道南部のブラジルへの奴隷貿易を野放しにしたところか、これまで赤道以北の国々へ運んでいた奴隷をブラジルへかえって増加して「輸入」という結果を伴ったもので、まったくのザル法であった。1826年にはイギリスと奴隷貿易停止条約を結び、3年後には奴隷貿易の停止を約束したが、停止の約束までの3年間はかえって奴隷貿易は増加した。1831年によく法的に奴隷貿易の禁止の措置がとられたが、大土地農園所有者や奴隷輸

---

29 Oberacker, a.a.O., S.234.

30 Vgl.Oberacker, a.a.O., S.235.

入業者たちは、この法律を遵守しなかった。1846年に5万、47年に5万5千以上、48年に6万の黒人が輸入されていた。この時代のブラジルは、奴隷制を基盤とした社会であり、「経済の九割が奴隷労働の上に成り立っている社会」<sup>31</sup> だったのである。ブラジルの住民の人種構成は、1800年に白人種92万人、混血人種122万人、黒人種196万人であり、1880年には白人種378万7千人、混血人種418万7千人、黒人種195万4千人であった<sup>32</sup>。基本的な社会構造として、ブラジルは農業や現業労働、家事労働などはすべて黒人奴隷に任せ、支配者としての白人たちはそれに寄生する社会であった。

しかしブラジルの奴隷制度は、国際的な人道主義の高まりの中で、いつまでも存続することはできなかつた。1850年に奴隷の輸入はようやく廃止されたが、それ以前に輸入された奴隷の立場は改善されず、国内での奴隷制は維持され続けた。1870年になって奴隷制の解除への一歩がはじまった。新生児の自由人化が定められたのである。そして1885年、「60歳法」により60歳を超える奴隷は解放され、ついに1888年に全面的な奴隷解放が行われた。皇帝がヨーロッパ外遊中に、娘のイザベル王女が摂政を行い、1888年5月13日、奴隷制の廃止をうたった「黄金の法律」(Lei Aurea アウレア法)に署名した。奴隷人口は1872年で151万人、1880年136万8千人であった。

奴隷制廃止を見据えて、ブラジル側は移民促進政策を強化した。例えば1884年、奴隷制廃止の4年前に、サン・パウロ州は新たな移民促進制度を制定した。12-50歳の労働可能人数を3名以上含んだ農業従事の家族には、渡航費を前貸しし、5年ないし8年の間に返済すればよいとしたのである。

こうしたなかで、イタリアからの移民が19世紀の後半には急増する。サン・パウロ州では1874年に最初のイタリア移民が到着した。70年代後半にはヴォルガ・ドイツ人のブラジル移民も増えた。ロシア政府との協定でヴ

---

31 シュテファン・ツヴァイク、宮岡成次郎訳『未来の国ブラジル』、河出書房新社、1993年、p.71

32 山田睦男、前掲書、p.230



オルガ地方の開拓のため移民していたドイツ人が、コーヒーブームに沸くブラジルで新たな生活を切り開こうとして移ってきたものである。

### 3. 二度の世界大戦とブラジルのドイツ移住民

1889年11月15日、君主制の廃止と共和制の設立を主張する軍のクーデターにより、皇帝ドン・ペドロ二世は退位し、フランスに亡命した。デオドロ・ダ・フォンセンカが初代大統領となり、共和国宣言をした。1891年には、アメリカ合衆国憲法を手本とした共和国憲法が公布された。

1899年に、コーヒー市価が暴落し、特にイタリア移民などコーヒー農園の契約移民は悲惨な状況になった。こうした中で帰国した移民も多数いたが、1908年からは日本からの移民も始まり、ブラジルは1890年から1929年の40年間に全体としてじつに350万人を超える移民を受け入れた（表1参照）。1880年のブラジル全国の人口が約992万8千人であったので、この数は相当に大きな重みを持っている。定着した移民はブラジル国籍を取得し、長い年月に結婚などで移民とその子孫の総人口に占める割合は相当に高いものと思われる。1970年代の推計であるが、ドイツ系のブラジル住民は300-400万人、ドイツ語人口は200万人程度である<sup>33</sup>（ブラジル全体の人口は1976年には1億人を超えている）。

前章で述べたように、南部の3州を中心にドイツ系の植民地では、ドイツ系の学校が建設され、教会ではドイツ語でミサが行われ、ドイツ語の新聞が発行されるなど、「閉鎖的な」ドイツ社会が形成されていた。1899年には、サン・パウロ市内にドイツ系のピニェイロス・クラブが創立されるなど、独自の文化活動も行われた。しかし戦争というナショナリズムが高揚する特別な時代には、こうした閉鎖性がブラジル住民との摩擦を起こすこととなった。1914年から始まった第一次世界大戦で、ブラジルは連合国

---

33 Vgl. Oberacker, a.a.O., S.169.

側につき、1917年にはドイツに宣戦布告した。前述したように、このときにはクリティバのドイツ人学校がブラジル人愛国主義者たちに焼き討ちされ、学校は戦争が終了するまで閉鎖に追い込まれた。

ファシズムが勢力を得た1930年代以降は国家主義が優位に立ち、さらに厳しい状況が出現した。まずドイツ系入植地でナチスの信奉者たちが活動した状況から見てみよう<sup>34</sup>。第一次世界大戦後のドイツは歴史的なインフレーションで知られる経済危機の時代であった。このため1920年ごろには、ドイツからブラジルへの移民が多数となった。1920年代の後半にドイツでナチスが支持を拡大すると、それに呼応してドイツ系入植地においてもナチス党の組織が結成されるようになった。1928年7月1日、サンタ・カタリーナ州のティンボの組織が、ドイツ本国の党本部によってブラジルにおける最初の在外地区支部として公式に認められた。ドイツ人入植地でナチス党が支持を集めるようになった理由は、(1) ナチス党の主張するドイツ愛国主義が、ブラジルにおける「閉鎖的」ドイツ社会の自尊心と結びついたこと、(2) 第一次世界大戦後にドイツからブラジルへ移民した人々の中には、経済的破綻や、移民せざるをえなかった原因はドイツに過大な弁償責任を課したヴェルサイユ条約にあると考え、ナチスの主張するヴェルサイユ体制打倒、ヴァイマル体制打倒の方針に共感を持ったこと、などが考えられよう。

ブラジルにおけるナチス党組織は、ヒトラーの考えを普及し、ドイツ系入植者たちに支持を広め、ドイツ系入植地での政治的権力を獲得することを目標に掲げた。1931年には、リオ・デ・ジャネイロの組織がドイツのナチス党本部によって認められた。その後、サン・パウロにナチス党の国外組織（A. O. = Auslandsorganisation）のブラジル代表部が置かれた。ブラジル南部のドイツ人居住地域では、ナチス党の在外組織が活動し、ブルーメナウではパレードも行われた。ブラジル政府の代表者も当初は、同じフ

---

34 Forster, a.a.O.

ァシズム体制への賛同を示すために、このようなパレードに参加していた<sup>35</sup>。

しかしブラジルにおけるナチス党の活動家たちは政治的に未熟なものが多く、必ずしもドイツ系住民の多くから支持を得ていたわけでもなかった。1933年にポルト・アレグレの市長であったアルベルト・ビンス (Alberto Bins) は、ブラジルにおけるナチスの活動について次のような否定的な見解をインタビューで述べている。

「最初に強調しておかねばならないことですが、われわれはまずブラジル人であり、それゆえアードルフ・ヒトラー氏の党員たちの理念を普及する運動とは一線を画しているということです。私はヒトラー主義の周知の目標からして、この立場に賛意を表明することをもとよりためらうものではありません。しかし党員に対する賛意とはまったく別個に、私は政治的立場を外国へ輸出することは不当であると指摘するものです。というのも、ブラジルにおけるドイツ系の要素の75%がブラジル人であるとすれば、ナチス党がこの75%の指導者になることは許されません。」<sup>36</sup>

一方、ブラジルの政治体制も1930年代には大きく変化する。1930年10月24日、クーデターでゼツリオ・ヴァルガスが臨時大統領に就任した。このヴァルガスはイタリアのムッソリーニの考えに共鳴した新体制主義者であって、ヒトラーのナチス党とも共通する方向の政治をめざしたのであるが、1937年以後、ブラジル愛国主義の立場を鮮明にした。

1930年12月15日に、入移民制限令が出された。これは1929年の世界恐慌のため、ブラジルでも失業者が急増し、このため1年間、外国からの移民を制限するというもので、ブラジル国内の失業者対策であった。

サン・パウロ市は1933年4月、州教育令で次のような制限を外国人学校に加えた。(1) 10歳未満のものに外国語を教えることを禁止すること、(2) 外国語の教師はブラジルの検定試験に合格したものであること、(3) 外

35 Vgl. Oberacker, a.a.O., S.236.

36 Forster, a.a.O.

国語の教科書はあらかじめ監督課の許可を得たものであること、(4) ブラジルの国民精神の涵養に有害な影響を与える教科書の使用を禁止すること。

これらの規制によって、学校の経営は不可能になり、サン・パウロ州当局によって閉鎖命令を受けた学校は、日系219校、ドイツ系7校、イタリア系5校、ポルトガル系4校、合計235校に達した<sup>37</sup>。

しかしヴァルガス大統領が推進したこのようなブラジル愛国主義の政策は、当時の民族国家の世界的な風潮に流されたとはいえ、根本的な誤りを含むものではなかつたらうか。

ポルトガル語のみを使用し、排他的に他言語の自由な使用や他言語による教育を禁止することは、多民族国家であるブラジルで、いつまでも植民地時代のポルトガル支配を維持し、徹底しようとするものに他ならない。多民族の国家で、スイスやカナダなど、複数の言語を公用語としている事例も現実にあるのであり、一つの言語の使用が国家の統一の前提となるわけではない。そもそもポルトガル語こそが近世になってからの侵略者の言語ではないのだろうか。ポルトガル語のみの使用では、この地に何千年も前から住んでいるインディオたちの言語や文化への配慮がまったく欠落しているのではないのか。ブラジル国家主義が、他の国家と異なるブラジルの風土を主張するのであれば、インディオたちの言語や文化こそがもっとも伝統的で固有のものとして尊重されねばならないのではないのか。また奴隷としてアフリカから連行され、ブラジルの人口構成の重要な部分となっている黒人たちの立場への配慮はどうなっているのか。

多民族から成立するブラジルの正しい国家の建設は、とりわけ少数民族への配慮をした上で、複数の文化の融和を基礎として行われなければならなかったのではないだろうか。弾圧や排除によるのではなく、異なった考えや文化、言語を前提として、その上でブラジル固有の社会が樹立される方向が当然追求されるべき方向ではないだろうか。

---

37 『八十年史』 p.81

ブラジルにおけるドイツ系移民について

1924年にはすでにドイツ系の入植から100年が経過しており、ブラジルを故郷とするドイツ系住民も多数存在していた。彼らは、たとえドイツ語で教育を受け、ドイツ系の文化の中で育った場合でも、もはやドイツへ戻ろうとするのではなく、ブラジルに忠誠を尽くし、ブラジルで骨を埋めたいと感じていたようである。「ドイツ系ブラジル移民百周年記念」としてフロリアノポリスのエグモント・バルツ (Egmont Balz) は次のようなブラジル愛国主義の詩を書いている。

ブラジルに

エグモント・バルツ

ようこそ、光り輝く衣装、  
ようこそ、太陽の国よ。  
高価な宝石が君を飾る、  
紺碧の海のリボンだ。  
無数の花は咲き乱れ、  
緑の葡萄がたわわに実る。  
やしの木陰に小さきわが家、  
銀色の月光に包まれて。

ようこそ、常緑の草原よ、  
実り豊かな葡萄の丘よ、  
黒い眼のすばらしい女性たちよ、  
澄んだ星空、おとぎの国の夜よ。  
あたりに蝶たちが舞い飛び、  
ハチドリたちが蜜を吸う、  
やしの木陰の花びらに、  
金色の日光に包まれて。

いつか天なる神が我を呼び  
君と別れる日が来たら、  
喜びも苦しみも後にして  
君の大地に埋められよう。  
あたりに無数の花が咲き乱れ、  
つたがやさしく包み込む、  
やしの木陰の静かな墓石、  
さびしく銀の月光に包まれて<sup>38</sup>。

この詩はドイツ語で書かれてはいるが、内容的にはブラジルの自然の美しさ、実り豊かな生活への賛美を表現したものである。ここにはドイツ文化の中で生活している人でも、おおいにブラジル人としての愛国的な精神を持っていることが示されている。多様な人種の住民は、多様な文化や言語を持ちながら、それぞれが生まれ育った「故郷」であるブラジルに強い愛着を感じている。画一的にポルトガル語を強制し、旧植民地宗主国の文化を「ブラジルの文化」とすることは、かえってブラジルの独自性をゆがめ、縮小し、消失させるのではないだろうか。

しかし当時のヴァルガス政権は、偏狭で一面的なポルトガル化政策を進め、外国語や外国文化の排除を徹底して行った。1937年11月1日、ヴァルガスはクーデターにより、「新国家体制」(エスタード・ノーヴォ)といわれる独裁政権を樹立した。国会、州議会は解散され、政党は解散となり、立法と司法は行政権のもとに統一された。こうした独裁体制のもとで、外国語と外国文化の弾圧が行われた。

1937年には、外国人入国法第8章第85および第87条で、14歳未満の者に外国語の教授を禁じ、外国語印刷物の発行は当局の許可を要す、とされたのである。

---

38 Scheltzke, a.a.O., S.55.

外国人の政治活動に対する制限や弾圧も強化された。1938年はじめ、アメリカ合衆国の圧力の下に、ブラジル当局は、ナチス党活動家の逮捕、尋問、活動拠点の家宅捜査、刊行物の発行禁止などの措置をとった。1938年4月、政令により、ナチス党在外組織（A.O）などの活動禁止措置をとった。ナチスに限らず、外国人の政治的活動そのものが禁じられた。

1938年8月、新移民法実施により、移民の文化と教育にさらに大きな制限が加えられるようになった。

1938年12月25日にはついに、ブラジル全国の外国語学校（主として日・独・伊）が全面的に閉鎖された。サン・パウロ州の日本人学校は294校、ドイツ系20校、イタリア系8校が閉鎖に追い込まれた<sup>39</sup>。

ブラジル全体では当時どれくらいのドイツ人学校があったのかは、資料によって多少数値が異なるが、プルツチュによると1934年に約2,000校<sup>40</sup>であり、オーバーアッカーによると1938年に約1,300校<sup>41</sup>である。これらがすべて閉鎖された。ドイツ系の文化団体などの協会も約2,000団体あったが、これも解散となり、約70のドイツ語新聞・雑誌も発行停止となった<sup>42</sup>。

1933年の「日本人教育普及会」の調査でブラジルの日系学校は187校、生徒数は9,178人という数字が残されているが、1930年代に多くの日本移民がブラジルへ入国したこともあり、1938年ごろには476校、約2万5千人と推計されている<sup>43</sup>。これらがすべて閉鎖された。日本語の新聞も発行停止が相次いだ。1939年、日伯新聞発行停止（1940年7月25日「ブラジル朝日」と改名して再刊）、1941年7月末、聖州新報廃刊、同年8月、伯刺西爾時報廃刊、日本新聞廃刊、ブラジル朝日はポルトガル語のみで発行されたが、これも同年12月停刊となった。

---

39 『八十年史』 p.81

40 Prutsch, a.a.O., S.37.

41 Oberacker, a.a.O., S.299.

42 A.a.O.

43 『八十年史』 p.81

第二次世界大戦中は、ブラジルは連合国側に味方し、とりわけ枢軸国出身の外国人ブラジル住民には取締りが強化された。1942年1月19日、サン・パウロ州保安局は、敵性国民に対する取締令を公布した。その禁止内容は次のようなものであった。

1. いかなる者も当該国国語にて記されたものを頒布すること
2. 当該国国歌を唱し、あるいは演奏すること
3. 当該国独自の敬礼をなすこと
4. 多数集合の場あるいは公衆の場において、当該国国語を使用すること
5. 当該国政府要人の肖像を人の集まるところ、あるいは公衆に展示すること
6. 保安局よりの通行許可証なくして、1地域から他地域に旅行すること
7. 私宅内といえども、私的祝祭の名義をもって集合すること
8. 公衆の場において国際時局に関し、討論あるいは意見の交換をなすこと
9. 以前に正当な許可証を取得しているとも、武器を使用すること。また武器弾薬あるいは爆弾の製造に使用し得べきものを売買すること
10. 保安局に予告なくして、転居すること
11. 自己所有の飛行機を使用すること
12. 保安局よりの許与される特別許可証なくして空路旅行すること<sup>44</sup>

ドイツ語の使用禁止は、ドイツ人居住地域では日常活動に大きな支障をきたした。ポルトガル語を自由に話せない住民も多数いた。情報の規制は、ドイツ語新聞の発行停止にとどまらず、ドイツ系住民は重要な情報源であったラジオを警察に供出しなければならなかった。これまでドイツ語で行われてきたドイツ人の教会でのミサもポルトガル語で行われるようになった。

---

44 『八十年史』 p.147、高橋幸春『日系ブラジル移民史』、三一書房、p.186f.



ドイツ系ブラジル人マリア・モーザー (Maria Moser) はこうした当時の状況について次のように証言している。「ドイツ語は禁止されました。買い物の際に、スパイがやってきていると、商人のヤーコプ・ライターから合図があり、私たちは筆談で欲しいものを伝えました。強いなまりの方言で話し、『私たちは英語でしゃべっているのだ』と主張する人もたくさんいました。」<sup>45</sup>

1942年1月29日、ブラジル政府は枢軸国と国交断絶し、在リオ日本大使館、在サン・パウロ総領事館等在外公館は閉鎖された。

こうした敵性国民に対する感情的な対立が高まる中で、政府・警察によるスパイ容疑での逮捕や家宅捜査などの弾圧とともに、ブラジル住民によるリンチ襲撃事件も発生したようである。高橋幸春によれば、パラナ州のパラナグア、アントニーナ付近の日本人、ドイツ人30家族は、一般のブラジル人に襲われ、すべてが略奪され、女性が凌辱されるという事件が起こった<sup>46</sup>。

1942年8月、枢軸国民は隔離収容されることになった。3世代目以上のブラジル国籍取得者との婚姻者以外のドイツ系住民は収容所送りの対象となった。ドイツ系住民が輸送された最大の収容所は、リオ・グランジ・ド・スウ州のカシアスにあった。戦時中はこの収容所だけで約3,000名が収容された。看守による暴行もあったという報告もあるが、比較的友好的に扱われたという報告もある。収容者の取り扱いは看守の恣意に任されていたようである。ブラジル全国で収容されたドイツ系住民の数は約15,000名と推測されている<sup>47</sup>。

1942年8月22日、ブラジル政府は枢軸国のドイツ、イタリアに対して宣戦布告し、交戦状態に入った。宣戦布告の直接的原因として、ブラジルの商船がドイツの潜水艦に相次いで撃沈されたことが上げられた。しかしド

---

45 Forster, a.a.O.

46 高橋、前掲書、p.190.

47 Forster, a.a.O.

イツ政府はこの攻撃を認めていないし、当時のドイツ潜水艦の行動範囲からブラジルへの攻撃はありえなかったと推定されることから、あるいはアメリカ合衆国の潜水艦がブラジルを連合国へ取り込むために、ブラジル商船を攻撃したのではないかという疑念もあるようである<sup>48</sup>。

1943年7月8日、枢軸国の海岸地方在住者に立ち退き命令がでた。対象はサントスの日本人とドイツ人で、1万余家族が、サン・パウロ強制収容所に集められ、その後奥地へ輸送された<sup>49</sup>。

このような外国人移民の対するブラジル政府の弾圧政策は、何重もの意味での人権侵害を犯したものである。第一に、言論、表現、集会などの自由という民主主義の基本的な権利を奪った。言語の禁止、文化団体や新聞発行の禁止、学校の閉鎖、集会や政治活動の禁止などによって住民の権利（表現の自由、言論の自由、思想の自由）はことごとく弾圧されたといえよう。第二に、なんら犯罪を行っていない人を拘束し、行動の自由を奪い、生存権を脅かした。第三に、人種的な偏見に基づき、住民を出自という人種上・出身国上の基準だけで差別し、収容所送りなどのきわめて非人道的な弾圧を加えた。

民主主義の原則からすれば、たとえ「反ブラジルの」「反政府的」な考えを持っていたとしても、個人のレベルでは思想の自由を保証しなければならない。当然のことながら、身体を拘束する場合は、テロ行為を実行する、あるいは軍事機密を漏洩するなど、明確な犯罪行為を行ったものだけを、証拠に照らして限定的に行わなければならない。なんら犯罪行為を行っていない人々を、人種や出身国だけで反ブラジルのと決めつけ、収容所へ送るようなことをするのは明らかに間違った権力の乱用である。

本来、「ブラジルの」であることは、ポルトガルの植民地時代の状況に戻ることはないはずである。現実にはブラジルの国内に、原住民であるインディオ、奴隷として連行されたアフリカ人、ヨーロッパや日本などの各

---

48 Forster, a.a.O.

49 高橋、前掲書、p.192.

地から入植した大量の移民とその子孫たちが長期間にわたって定住し、また多人種の子孫たちがすでに「ブラジル人」となっているわけであるから、このような多民族国家で外国語の使用を禁止し、犯罪行為もしていない無実の住民を拘束して収容所送りとしたことは、それこそが犯罪的で、「反ブラジルの」行為ではないのか。

多民族の文化がそれぞれの特徴を示しつつ、相互に刺激しあって、より豊かな新しい文化を生み出すことがブラジルにふさわしい課題なのではないのか。出身国の言葉とブラジルの言葉をバイリンガルに使いこなし、異なった文化をそれぞれに深く理解しつつ、有機的に結合しうる国際人は、このような「ブラジルの」土壌においてこそ育成されるのではないだろうか。

ヴァルガス独裁政権が推進した偏狭な弾圧政策とはまったく逆の立場を、ドイツ系ブラジル人のヴォルフガング・アモン (Wolfgang Ammon) の次の詩は示している。この作品は、1936年というナショナリズムの対立した時期に『在ブラジルドイツ人のためのカレンダー』に発表されたのである。そしてこのような民族的対立の時代であるにもかかわらず、この詩はドイツへの愛着とブラジルへの熱い思いを両立させる移民の気持ちを明確に示している。このような感情を持つ人たちを「反ブラジルの」であるとして、収容所送りにすることが正しかったのであろうか。

ドイツ系ブラジル人の讃歌

ヴォルフガング・アモン

父なる国ブラジルに栄えあれ。  
自ら切り開いたこの大地、  
そこがわれらの揺りかごの地、  
われらの祖先が血と汗流し  
斧をふるってうち立てた、  
ここがわれらのふるさとの地。

母なる国ドイツに栄えあれ。  
ドイツの血はわれらの資産だ、  
計り知れぬ大きな力だ。  
われらの命は偉大なる  
父なる国ブラジルに向けられる。  
されどわれらはドイツを忘れはせぬ。

太陽の国ブラジルに栄えあれ。  
心身ともにこの国を愛し、  
われらはこの命をば捧ぐ。  
ドイツの祖先から受け継いだ  
われらの心髄に誇りを持ち、  
なおかつこの国に忠誠を尽くす。

緑と金の旗に栄えあれ。  
目の前でその旗がはためくと  
われらの胸は高く打つ。  
その旗の示すところ、  
喜びも苦しみもともにして、  
われらは死すまで従い行かん<sup>50</sup>。

---

50 Scheltzke, a.a.O., S.99.